

## \*\*\* 八田與一(はった・よいち)について

GW が明けた。国際通を自認するあなたや海外旅行帰りのあなたでも、この名を知っているのはごく限られた方々であろう。

日本国内よりも、業績を上げた台湾での知名度が高く、とくに高齢者を中心にその業績は高く評価されており、台湾の烏山頭(うさんとう)ダムでは、毎年與一の命日である5月8日に慰霊祭が行われている。今年もその日を迎えた。

今なお台湾で最も尊敬されている日本人の一人が八田與一である。

與一は戦前、日本統治下の台湾総督府の土木技師として嘉南(かなん)平野に「嘉南大圳(たいしゅう)」と呼ばれる東洋一の灌漑施設を整備した。台湾最大の嘉南平野は洪水、干魃、塩害の三重苦に悩まされる不毛の大地だったが、この地を沃野に変えるため灌漑用の大ダムと給排水路を計画し、この一大事業を成功に導いた。

2年間の調査を経て大正9(1920)年着工、10年の歳月と幾多の苦難を乗り越えて昭和5(1930)年に完成したもので、主な灌漑施設として、貯水量1億5,300万m<sup>3</sup>の烏山頭(うざんとう)ダムと1万6,000kmに及ぶ給排水路が整備され、総工費は今日で5,400億円といわれる。また、土木作業員の労働環境を適切なものにするため尽力したこと、危険な現場にも自ら進んで足を踏み入れたこと、事故の慰霊に際して日本人も台湾人も分け隔てなく行ったことなど、彼の人柄を偲ばせる多くのエピソードも残されている。

こうして、香川県の広さに相当する15万町歩の嘉南平野は肥沃な緑野に変貌し、今日台湾最大の穀倉地帯が誕生したのであり、この地の苦しい生活から脱却できた60万人の農民たちは、與一を「嘉南大圳の父」と仰ぎ敬愛した。

なお、烏山頭ダムの大きな役割は、今は昭和48(1973)年に完成した曾文溪ダムに譲っているが、この建設構想も與一によるものであった。烏山頭ダム周辺は現在、八田與一記念公園として整備され遺徳を伝えている。

與一の伝記は、司馬遼太郎「八田與一のこと」、「珊瑚潭のほとり」(『街道をゆく 40 台湾紀行』朝日新聞社、1994年)、古川勝三『台湾を愛した日本人(改訂版) -土木技師八田與一の生涯』(創風社出版、2009年)、斎藤充功『日台の架け橋・百年ダムを造った男』(時事通信出版局、2009年)などに記されている。

明治19(1886)年2月21日石川県河北郡花園村(現在は金沢市今町)で誕生。石川県尋常中学、第四高等学校(旧制四高)を経て、明治43(1910)年東京帝国大学工学部土木科を卒業、台湾総督府内務局土木課の技手として就職した。当時台湾では初代民政長官であった後藤新平以来、マラリアなどの伝染病予防対策に重点がおかれ、與一も当初は衛生事業に従事、嘉義市・台南市・高雄市などの上下水道の整備を担当した。その後、発電・灌漑事業の部門に移り、着工中であった桃園大圳の水利工事を成功させている。

第2次大戦中の昭和17(1942)年5月8日、調査のため長崎からフィリピンに向かう途中、乗船が米軍潜水艦に撃沈され56歳で亡くなった。没後贈正四位勲三等。さらに、

その妻、外代樹(とよき)は、敗戦後の昭和 20 年 9 月 1 日、夫の後を追うようにして烏山頭ダム放水路の放水口に投身自殺した。嘉南の人々は與一の功績を称え、遺徳を永遠に伝えるためダムの傍に銅像と夫婦の墓を建立、毎年盛大な墓前祭を行っている。

また、現在も中学生向け教科書『認識台湾 歴史篇』に八田與一の業績が詳しく紹介されており、平成 16(2004)年末に訪日した、農業経済学者でもある李登輝台湾総統(当時)は、與一の故郷金沢を訪問した。

今も烏山頭ダムとともにある與一の銅像は、ダム完成後の昭和 6(1931)年に建てられたものである。住民民意と周囲意見を踏まえたユニークな像は、固辞していた本人の意向を汲んで一般的な威圧姿勢の立像ではなく、工事中に見かけられた與一が困難に一人熟考し苦悩する様子を模しており、碑文や台座は無く地面に直接設置された。戦中、地元有志により守り隠されていた像は昭和 56(1981)年 1 月 1 日に再びダムを見下ろす元の場所に戻された。また、顕彰事業は妻外代樹にも拡大され、平成 25(2013)年の命日 9 月 1 日、記念公園内に我が子を抱く銅像が建立された。



烏山頭ダム湖を望む與一の銅像と夫妻の墓

大学卒業後すぐ台湾に渡り、その地に骨を埋めるつもりでその国のために尽くすという国際感覚は、與一が東大時代に、廣井勇教授の薫陶を受けたことによるものとされる。廣井のもとで学んだ同級生には北海道に渡り夕張川新水路建設に功労のあった保原元二がおり、遡って、パナマ運河、荒川放水路、信濃川大河津分水路の整備に尽力した青山士もその系列に繋がるひとりである。大河津分水路補修工事竣工記念碑に刻まれた「萬象ニ天意ヲ覚ル者ハ幸ナリ」(表面)、「人類ノ為メ國ノ為メ」(裏面)は廣井の影響を受けた青山の生き方を示すものである。

札幌農学校 2 期生として内村鑑三や、後藤に招聘されて一時台湾にも働いた新渡戸稲造(製糖振興に尽力、“台湾の砂糖の父”と言われている)らとともに学んだ廣井は、農学校時代にも、石狩川や満州の遼河の改修に尽力した岡崎文吉ら国際感覚を持った多くの人材を育てている。奇しくも、與一が大学を出て台湾に渡った明治 43(1910)年は、その岡崎が中心となって策定した石狩川の計画的な整備のはじまりの年でもある。

20150508 MS生

このことをきっかけに 2019 年 3 月台湾を訪問し、見聞を拓げるとともに多くの啓発を受けた。その詳細は『はじめての台湾紀行』として冊子にまとめ、別途HPの叢書コーナー(水と川紀行)にも掲載している。併せて参照いただければ幸甚である。

<http://www.suiko.jp/rkk/page6.html>

(参考) 烏山頭ダムの概要

昭和 5(1930)年完成

形式 スリム型アースダム

(セミ・ハイドロリックフィル工法)

高さ 56m 堤頂長 1,273m

堤体積 1,100 万  $m^3$

総貯水容量 1.5 億  $m^3$

貯水池面積 13.0 $km^2$



(参考) 曾文溪ダムの概要

昭和 48(1973)年完成

形式 ロックフィルダム

高さ 133m 堤頂長 400m

堤体積 930 万  $m^3$

設計洪水量(洪水吐能力) 9,640 $m^3/s$

総貯水容量 7 億  $m^3$

貯水池面積 17.1 $km^2$

